
たんぽぽ

しゃわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たんぽぽ

【コード】

N6205D

【作者名】

しゃわ

【あらすじ】

世間に負い目を感じていた高校生が、恋愛を通して自分の人生を見つめ直す、優しく温かい物語。

1、笑顔

今日も気持ちのいい晴れ。道路には一輪のタンポポが当たり前のように咲いている。僕は目も向けなかった。その咲き様に。その咲く意味に。

小学三年の時に両親が別居した。理由は父さんだった。酒を止めようとした母さんに手を出した。

それから僕は劣等感に浸っていた。

「なんでよりによって俺なの？」

電車のドアの目の前で周りを気にせず大きな声で友達と話す女子。そんなに面白い話をしてんのか知らないけど、相変わらず大きな笑い声。

コンビニのゴミ箱の前でどっしりと座る男子高校生三人組。明らかに自分より年上だが何が偉いんだか。不幸な思いはこいつらでもよかっただろって神様に言っただけ。神様はアホだ。

自分で言うのもなんだけど、性格は明るいし、リーダーシップもあると思う。実際に委員長とかやってたし。一緒にバカやる友達もいる。

恋愛だけが苦手。こんな風に意地張ってみたけど、ようするに付き合った事が無かったんだよね。

バレンタインデー。一番俺がムカつく日。俺が言うのもおかしいけど、男って単純。学校来た途端にずっとそわそわしてやんの。マジで笑えるよ。俺なんか15年も貰ってないから、こういう奴を見るのが趣味になっちゃった。我ながら悲しい奴。

いつものように下駄箱のロッカーを開ける。無いつて分かっているけど少しばかり期待してる自分が恥ずかしい。玄関に出て自分の

コトを待つてる人が居ないか見回す。もちろん居ないけどね。落胆した僕は自転車置き場へ向かう。そこにはいつもの自転車と、カゴの中にあるいつもは無い赤いラッピングの箱。

びっくりした。好きな人が目の前にいる訳でもないのに、とても緊張した。高鳴る鼓動を抑えようとしたけど無理。こんな気持ち初めてだった。そしてチョコを貰っただけで、誰が自分にくれたか犯人探しのようなものが始まるんだ。

校門を出ると、迎えを待つてるような女子が居た。自分の学年で1、2位を争う程の美貌の持ち主。このかわいい人はカツコイイ彼氏にあげたんだろうな。バレンタインデーはやっぱり美男美女のカップルが輝く日だって、自分は勝手にイメージを作ってた。それにしてもめっちゃ笑顔。最初に言う言葉でも考えながら彼氏を待つてんだろうなあ。

でも僕を見てた。そしてあの笑顔。思わずドキツとして急いで走り抜けた。振り返るとまだ見てる。僕も思わず笑顔で返した。家に帰ってもあの笑顔が忘れられなかった。

1、笑顔（後書き）

この話はフィクションです。毎週金曜に更新するので楽しみにして
いて下さいね（＾o＾）ノ

2、負のオーラ

これ、駅前の占い師のお婆ちゃんに言われた。僕にはそんな能力みたいなものがあるらしい。普通なら落ち込んだりするだろうけど、だいたい分かった。今までそういう人生だったからね。

まあ、こんな自分の言い訳を聞いてくれよ。

僕が人を本気で好きになったのは中学一年のときだった。

その相手はローカルアイドルのあみちゃん。

通称あみあみ。

27歳。聞いて笑うだろ。この頃は年の差なんて関係ないんだよ。バラエティーで汚れ役をしていたとしても僕には輝いてみえたんだ。正直この業界で27は厳しい。そんなコトくらい中1の僕でも分かった。でもそれを分かっていたいのかのように可愛らしく振る舞ってくれるあみちゃんが好きだった。大好きだった。

僕は気づく。どんなに頑張ってもあみちゃんは僕には向かってこない。振り向いてもくれなかった。握手会の時も愛想笑い。気づくのが遅すぎた。気づいた時には中学卒業してた。

虚しい人間だろ？でも自分は一生懸命恋をしたつもり。

ただそれがいい結果にならなかっただけ。

そうやって自分に言い聞かせる。

いや、言い聞かせるしかない。泣きたくなかったけど、ボーっとしてるだけで泣いて出ちゃうんだよ。手で拭いても拭いても落ちてくる。目のどこにしまってあんのか聞きたいくらい、流れ落ちてくる。部屋で夜中の3時まで泣いた。こうやって僕の初恋は終わったんだよ。初恋って呼べるのか分かんないけど。

それ以来恋には全く興味が無くなった。かわいい子を見て、かわいって思っけど、付き合いたいなんて絶対に思わなかった。

僕のアイドル。あれは間違いなく僕のアイドルだ。あみちゃんとは違う。振り向いてくれた。あれは愛想笑いじゃなかった。あの人が僕にチョコをくれた証拠なんて無いけど、それでも十分だった。可愛かったなあでは終わらせたくない。付き合いたっても思ってる。僕は今あの人に恋をしている。

早くチョコの差出人を見たくて、急いで帰っていた。こんなにスピードを出して帰ったら事故を起こしそうだけど、どうでもよかった。やっぱりどうでもよくはないな。まあ、あの時はそのくらい胸が踊ってたんだよ。

これが昨日の6月4日のこと。僕にも少し遅い春が来た。家への帰り道には近づきつつある夏を知らせるタンポポが元気に何輪も咲いていた。

もうあのお婆ちゃんには負のオーラなんて言わせない。

3、バレンタイン

やっとのことで公園に着く。誰も居ないベンチに座る。もちろんチヨコの確認のため。胸の鼓動が抑えられなかった。絶対あの校門の人からだと勝手に思っていた。だってあんなに自分を見て笑ってくれたから。

僕は偶然にも不運な少年。他人事に巻き込まれた不運な少年。そして女性に縁が無い記録をまた更新。何故かというと、チヨコ同封の手紙を見たら、
「ずっと前から圭君のことが好きでした…。よかったら付き合ってください！byさおり」
って書いてあったから。

良かったじゃんって思うでしょ？でも残念ながら僕の下の名前はしゅう。つまりこのチヨコは人違い。僕のかすかな期待はこっぴみじん。

「でも気にしない。15年間こんな調子だったし。」って言い聞かせたけど、気にしない訳ない。あんなに必死にチャリ漕いできたのに。あんなに信号無視したのに。生まれてから今までで一番虚しい瞬間だった。好きになりかけてたバレンタインデーはやっぱり嫌いになった。

しばらくして、こう気がつく。

「1つのチヨコに期待した自分もアホだけど、この差出人のさおりっていう人もアホ。普通バレンタインに渡す相手間違っ奴いねえだろ。」

ここで僕の良心が働く。

さおりっていう人を探して届けてやろうか？

気が向かない。

じゃあ圭って奴に届けてやるうか？

これも気が向かない。

だって俺が圭に渡す瞬間、ホモに思われそうで嫌じゃん。こうして30分考えた末にたどり着いた決断は“試食”。

“試食”だったはずが完食してしまった。めっちゃ美味かった。手が止められなかった。ますます自分宛てのチョコが欲しくなった。「圭って奴のおかげでいい思いさせてもらったわ。」そう心に思っ
て、チョコの箱を公園のゴミ箱に捨てた。こうして6月の薄暗い夜7時に家へと帰っていく。

4、転機

2月15日。今日も学校へ登校。今日はなんだか楽しみ。だって圭っていうやつとさおりっていうやつに会ってみたいじゃんか。そのためにも傷心でも学校に来たんだよ。

バレンタインデーだけじゃないんだよ？面白いのは。

2月15日は人々の喜怒哀楽が見え隠れする日。いろんな人見ると楽しい。

恋が成就した人。

昨日のシヨックからか学校に来ない人。

その人を先生に見えないようにメールで励ます人。

まだチヨコを渡せずにいる人。

返事が返ってこないから明らかにそわそわしている人。

こういう人達を見るのが、毎年欠かさず務めている僕の役目だ。

今日はそれだけじゃない。

圭とさおりを探すんだ。

職員室から担任の机を見つけ、中から生徒個表を取り出す。そこま
で自分は悪い奴じゃないから盗まずにコピーする。コピーした生徒
個表の中から、さおりと圭を探し出す。

1年2組の個表に高橋 圭というやつを見つけた。でもさおりとい
う下の名前はなかった。

こっそりと授業中の1年2組を観察。自分の学校はどのクラスも
出席番号順に縦から座られていたから、すぐに見つける事が出来た。
正直キモい。自分にも勝算ありって思ったくらい。こいつと横に並
んで歩いたら、自分カツコよく見えんだろーなって真剣に思ったも
ん。

発見できなかったさおりが気になってしょうがなかった。他校の奴だったのかな？そう思いながら渋々帰ろうとする。下駄箱のロッカーを開けると、そこには赤い箱。

「ええええつつつつ！？」一旦ロッカーを閉めて自分のロッカーが確かめる。

「1512」

確かに1年5組12番の自分のロッカー。

間違いなく赤いラッピングの箱。

金色のリボン。

しかもよく見ると白の手紙…？

状況を整理するのに1、2分かかった。

恐る恐る手紙を開ける。

「しゅう君へ

いきなりの手紙で驚いた？ごめんね。いつもしゅう君を見ると、私笑っちゃうんだ。

しゅう君が驚く顔も大好き！

しゅう君の体操着とか面白くてたままないし（＾Ｏ＾）

あ、悪口言ってるつもりじゃないよ？

それくらいしゅう君は何もしなくても面白いの！

だから、私しゅう君のそばで笑っていたいんだ。

返事待ってるからね。

byゆい」

春が来た。

僕に青い春が来た！！

何故か知らないけど涙が出た。

16年目の奇跡。もうあんな惨めな15年間と別れを告げる時が来たんだ！

もう有頂天だよ。

すっかりさおりっという名前を忘れてた。
さおりと圭の話はどうでもよかった。

手紙を読み返して8回目。

笑みが止まらない。

気持ち悪いだろ？

それでもいいんだ。

手紙を読み返すとまた涙が自然に湧いてくる。

気がつくと寝ていて、時計を見ると4時15分。スッキリと目覚めてしまった。だからずっと起きてるコトにした。しばらくして気がつく。

「ゆいつて誰だ？」

コピーした生徒個表からゆいを探す。

該当者一名。1年2組の桜井 唯という人だった。1年1〜3組は自分と違う階なので、見たコトも聞いたコトもなかった。

「今日こっそり見てみよう。」

そう思いながら高ぶる気持ちを抑えきれずに学校の支度を始める。
まだ4時28分だった。

5、騙し

気付いたらいつもより30分も早く学校に来てしまった。ある程度は緊張してるんだろう。いや、ある程度どころじゃない。結局あれから緊張して眠れなかったんだ。

もはや思い出となった下駄箱のロッカーを開けるとまた手紙。開けてみると、

「昼休みね（＾o＾）／」

と書いてあった。これはゆいの手紙だなんて思ったけど、場所が書いてない。つまりオレは昼休みどうするコトも出来ない。ゆいってやつは、肝心なトコを忘れるおっちょこちょいなんだなって思って笑った。

「しゅう君居ますか〜!？」

いきなり教室に響き渡った女子の声。ドアからこっちを見ている。その女子は僕の手をいきなり引いて、教室から連れ出した。同じクラスの男子も女子も全員僕を見ていた。初めての優越感と恥ずかしさが僕の顔を赤らめていた。

「いきなりなんだよ？恥ずかしいだろ。」

ちよつとカッコつけて言う。今くらいいいだろ。ずっとカッコつけて無かったんだし。

「ゆいって読んでね！いきなりで驚いたと思うけど…。あの…返事聞かせてもらっていい？ずっとドキドキして待ってたの。」
僕は言葉を返す。

「何でオレがいいって思ったの？」

ゆいも言葉を返す。

「しゅう君の驚く顔が好きだから!」

「驚く顔！？なんだそれ？」

「いきなりだけど、しゅう君の自転車のカゴにさおりって人がチョコ入れたでしょ？それあたしが驚かせるために入れたの。その後こっそりついていったら、公園で他人のチョコ食べちゃうんだもんね。さおりなんて人知らないし。」

ゆいは得意気に笑いながら言う。僕は全て見られていた感じで恥ずかしかった。

「あういう時の顔が大好きなの！」

どんな顔だよって心でツッコむ。

「ねえ、ねえ結果は？じらしすぎ！」

「こんなオレで良ければ全然。」

またカッコつけた。

「ありがと！しゅうって呼んでいい？それとも図々しいかな…？」

「ああ全然いいよ。」

気がつけば素直に言ってた。カッコつけるのは自分に合わないらしい。

ゆいは言う。

「今日から一緒に帰ろうね。毎日だからね。」

「おう。放課後な。」

照れながらその場を後にした。

後の授業は頭に入らない。自分が今付き合ってるなんて信じられなかった。

とにかく初めてづくしで胸がいつぱいだった。

今思えば昼休みも驚かされてたなあ。こんな風にゆいのコトばかり考えていた。

6、帰り道

学校に行くのが楽しい。

登校するのはもちろん嫌なんだけど、放課後にゆいと帰ると学校も楽しいなあって思うようになるんだ。

人を好きになると見る世界が変わるって言うけど、全くその通り。テストとかマラソン大会とか普段だったら最悪な学校行事も、ゆいと一緒だと楽しく思える。

あの日から1ヶ月が経って、僕がゆいを思う気持ちは、2倍3倍と増えていった。

ゆいは電車で通学していたから、僕は毎日駅までゆいを送っていた。

今日もいつものように、ゆいが乗る18:52発の電車来るまで、駅の待合室でゆいと話していた。

ちよとど春休み前だったから、春休みどうしよっか？っていう話で盛り上がった。

今日は偶然なコトにほとんどの他校がテスト期間中で、駅がガラガラだった。

待合室でゆいと2人きり。今日は最高に運が良かった。

18:46。ゆいが乗る電車が来た。

ゆいが言う。

「いつもいつもありがとうね。明日もいろんな話聞かせてよ！春休み楽しみにしてるからね。」

「今日みたいにくだらな話ならなんぼでもしてやるよ。気をつけて帰ってな！」

「気をつけてって言われても電車乗るだけだから！」

「点字ブロックでこけるかもしれないだろ！ありえないけど。」

「ありえないから〜！」

こう言ってゆいは笑った。いつもこんなように、たわいもない話をしていた。

でも、この話をするためにゆいを見送りに来たんだ。

ゆいといつでも話がしたいから。

例えば、ゆいが夜の2時とか3時に電話を掛けてきたとしても、僕は眠そうな声とかをせず、どんな話をすればゆいが笑うかを考えて、元気にゆいと話をするだろう。

それくらいホントはもつと話していたかった。

けど、この電車を逃すと次は20:24になってしまう。住んでいる所が田舎だから電車の本数が少なかった。だから、仕方なく見送るしかなかった。

「次の電車で帰れよ。もつと話していたいんだ！」
つて言いたかった。

こんなコトを言ったら、ゆいに嫌われそうで、いまだにチキンな僕は言えなかった。

ゆいが電車に乗ったのを確認して、僕はしぶしぶ帰る。

ゆいに手を振ろうとして振り向いてみると、そこには出発した電車と、その電車に乗るはずのゆいが、僕を見て立っていた。

7、成長

「あたし、次の電車で帰っちゃおう!」

ゆいは明るい笑顔を添えながら言った。

自分はずごく嬉しかった。

少しだけ、ゆいの両親に怒られるんじゃないかと考えたけど、そんなことどうでもよかった。

友達にゆいの事を聞くと、ゆいは学校では物静かな存在らしい。

授業で意見を言うために手を挙げたりしないし、女友達と昼休みにガールズトークで盛り上がり上がってるような、ごくごく普通な女子だと言っていた。そんなゆいが今、僕の目の前で学校では見せないような笑顔を見せている。

乗るはずの電車に乗らず、僕と話している。

この時に僕はゆいを手放したくないって思ったんだ。

どんな困難がふりかかっても、この先何があったとしても、僕が身代わりとなってゆいを守る。

そう決めたんだ。

ある話の途中でゆいが言う。

「電車に乗らなかつた時驚いてたでしょ?あのマヌケな顔思い出すと笑える〜!」またゆいに驚かされてた。

僕はゆいに驚かされっぱなしだ。

でも不思議に悔しくなかつた。

ゆいに対する愛情が込み上げてきた。

ゆいを抱き締めた。

強く強く。

僕はなぜか泣いていた。

こんなにも人を愛したのは初めてだったから、うれし泣きだったの

だろうか…？

ゆいは驚いていた。

「自分だつて驚いてんじゃんかよ。」

そう言つてゆいに初めてのキスをした。

正直言つと初めての事だったから、感触とか味とかそんなものは覚えてない。

でもあの時になぜあんな勇気が出たかは、今も分からない。

今になつても分かる事は、“ゆいが好き” なんじゃなくて、“ゆいを愛してる” ということ。

あの日から僕ははずっとずっと強くなれたんだ。

毎日のメールは当たり前前、休み時間毎にごっそりトイレに行つて、たつた5分間の電話もした。

放課後はいつものように一緒に帰つてくれない話をして、最後にキスをして帰る。僕らの愛は深く深く深くなつていったんだ。

1年が経つた。

僕らはもう2年生だ。

修学旅行とか学校宿泊会とか楽しみな行事がいっぱいだった。

ゆいと一緒に修学旅行の実行委員になれれば楽しいだろうなあとかそんな事ばかりを考えていた。

帰りに修学旅行の実行委員の事を話した。

「なあ、一緒に実行委員になろう！俺らが一緒に班になるように、こっそりズルしちゃおうな！」

なぜかゆいは重い表情をしていた。いつものゆいの明るいテンションじゃなかった。

修学旅行の話になつてから、急にテンションが下がっている。

ゆいは重い口を開いて、

「あたし、修学旅行行けないの…。」

僕には何がなんだか分からなかった。

8、決心

唐突に出てきたゆいの言葉は、僕の心に疑問符を投げかける。

「行けないって……なんで？」

「それは……」

またゆいは黙り込む。

それから10分が経っただろうか、ゆいがまた口を開く。

「旅行代払えないんだよね……。今ちよつと家のお金が無くて……。ごめんね」

話を詳しく聞くと、ゆいの姉ちゃんが有名な私立大学へ入学するため、入学金と授業料がかなりかかるということだった。

「そっか……。しょうがないな……。なんか気を悪くさせてごめんな。」

「こつちこそ気を悪くしてごめん！ 凶々しいけど、お土産期待してるから！」

ゆいは明らかに無理して笑っていた。

そんなの分かっていた。

それから家に帰ってすぐに寝てしまった。

起きていたくなかった。

なんかずつと寝ていたかった。

それほどシヨックだった。

ゆいの無理した笑い顔が忘れられず、思うように眠れなかった。

顔を洗い、頭を洗い、コーヒーを飲みながら、僕は1つの決心をする。

土曜の朝、僕は面接を受けていた。

「なんのために働くのですか？」

“ゆいのため”って言いたかったけど、

「自分を少しでも成長したいからです。」

って言うておいた。

このコンビニのバイトで少しでもゆいを楽しんであげたかった。時給700円、土日の10:00〜18:00という条件で無事に面接に合格。

これからが勝負だ。

バイトと学業の両立ならともかく、オレの場合は、バイトと学業と部活の三立をしなきゃいけない。

無理だと思うだろ？

オレも思ったけど、どのくらいゆいのために出来るか、自分に試してみたかったんだ。

部活にも手を抜きたくないし、勉強も皆についていきたいし。

一番は、ゆいと一緒に修学旅行行きたい。

そのためバイトなら、どうなったって続けていけると思ったのさ。

バイト先で優しい先輩に出会って、仲良くしてもらった。

不安だったバイトも少しずつ慣れていった。

部活にも土日以外は毎日参加した。

学校の成績はどんどん下がっていったけど、ゆいへの思いはどんどん増していった。

今の自分にとって、ゆいの為に働くという事が幸せだった。

ゆいの喜ぶ顔を想像しながら…。

修学旅行の日まであと2カ月と迫っていた。

8、決心（後書き）

お手数ですが、宜しければ感想などを書いてもらえるとありがたいです（^O^）

9、あなたのために

バイトを始めて1ヶ月。

そして修学旅行まで1ヶ月。

僕は1日も休まず、毎日バイトに通っていた。

体はかなりくたくただけど、心はゆいへの愛情でいっぱいだ。

疲れた体を栄養ドリンクで奮い立たせ、今日もバイトへと向かう。

バイトをやり始めてから、ゆいと会う時間が短くなった。

ゆいは会う度に、

「なんか疲れてない？部活大変？」

って気にかけてくれる。

「大会近いからメニューキツくてさ。体くたくただよ。」

って嘘をついた。

「無理だけはしないでね。」

「分かってるから。じゃあ、今日はここまでな。明日も一緒に帰る

うな。」

「うん！バイバイ！」

ゆいと別れた後、急いでバイトへ向かう。

最初は、土日だけという条件だったが、店長から仕事に対する姿勢をかわれて、平日も部活終わってからの2時間、特別にやらせてもらえる事になっていた。

これも全てゆいのためと思うと、重い体にもムチを打ってがんばれるんだ。

バイトの先輩の大学生の井上さんに、

「しゅう、この一覧に載ってる商品を全部注文してくんねえか？オレこつこついうの苦手で…。代わりに今日メシおごってやつからさ。頼むわー！」

「全然いいですよ。」

「悪いな。俺、あつちでレジやってっから。」

「分かりました。」

先輩から与えられた仕事をこなしていく。

急に、もうすぐホワイトデーが近いということに気づく。

「何返そうかな…。悩むなあ…。」

すると、僕の目に飛び込んできたのは、一覧表の中にあつた、“パリの本場パティシエが作る高級チョコレート詰め合わせ”。
値段は4800円。

決して安い値段ではない。

たまには奮発してみようかなと思い、こっそり注文した。
ゆいを驚かせたかつたんだ。

ホワイトデー前日。

高級チョコが業者から届く。

ラッピングの時点で、普通の物と質が全然違う。

少しばかり優越感。

俺にもこんな高いもん買えるんだぞ的な。

「楽しみだなあ…。」

ゆいと会う約束をした夜を楽しみにしていた。

ゆいには内緒のバイトが終わってからだけどね。

「今日も注文やつてくれる？」

と井上さん。

「いいですよ。」

と俺。

こうしてまた机に向かいながら、片手にボールペンを持ち、もう片手には受話器を持つ。

一生懸命僕は仕事をしていた。

いや、一生懸命仕事をしすぎていた。

僕は椅子から落ちて倒れていた。

9、あなたのために（後書き）

2話の本文中で、「昨日の6月4日のこと」と記載しましたが、「今日の2月14日のこと」の誤りでした。お詫びして訂正致します。

10、諭吉

気がつくとも病院の中。

どうやら今は救急病棟に居るらしい。

医者からは、

「極度の慢性疲労で貧血を起こしています。最低でも3日は休んで下さい。」

と言われた。

バイト先にも心配され、1週間はバイトに出なくていいと言われた。僕は何も言葉を返せない。

今の自分の姿はありえないくらい惨めだ。

僕はただの貧血なのに、個室にまわされた。

周りに人が居ないからいいけど、個室と聞くと自分の病院が重いんじゃないかって心配になる。

高校の友達、バイトの友達、家族がお見舞いに来てくれた。

自分の不安な気持ちが少し落ち着いていた。

21:14。来ないだろうと思っていたゆい came。

かなり機嫌が悪い。

見た感じですぐに分かった。

「何してんの？」

ゆいは不機嫌に言う。

僕は言葉を返せない。

「何で黙ってたの？」

「……………」

「何かしゃべってよ。」

「ごめん……………」

僕は弱かった。

体も心も全然弱かった。

「話すコト無いから帰る。」

ゆいはこう言ってドアを開けた。

「これホワイトデーのなんだけど……」

そう言っただけは、ベッドの毛布の中から、あのチョコレートを取り出した。

「そういう気分じゃないから。」

ゆいは帰った。

チョコレートを見ていると、自然に涙が出てきた。

一粒、また一粒と。

バイトもチョコも全てゆいのため。

ゆいの笑顔のためだけにやってきたのに……。

ゆいと一緒に修学旅行に行きたい一心で始めたのに……。

涙が止まらなかった。

涙を止められなかった。

しばらくして泣き止むと、どうすればいいのか分からず、ただ外を見てポーツとしていた。

何もやる気が起きなかった。

井上さんに電話を掛けた。

「僕、バイト辞めます。すいませんでした。」

井上さんは、

「辞めちゃうのか。なんか惜しいな。お前はオレより働いてたし。

バイト辞めても、たまに顔出しに来いよ。」

「ありがとうございます。」

井上さんは本当に優しくかった。

ゆいとゆっくり話がしたくなった。

このままの雰囲気で居るのが嫌だった。

だからゆいにメールをした。

「ゆっくり話したいから、明日また来てくれないか？」

返信はあまり期待してなかったけど、2分後にすぐ返信が来た。

「わかった。ゆっくり話そ。今日はちょっとごめんね。」

メールを返す。

「じゃあ明日な。おやすみ。」

「うん。おやすみ。」

こんなにやりづらいメールは初めてだった。

僕は、必死で稼いだ7万5000円を封筒に入れて、チョコレートと一緒に病院の部屋の机の一番下にしまった。

この7万5000円は、なんとしてでもゆいに受け取って欲しかった。

自分が貧血になってまで働いた、汗の結晶だから。

不思議なコトに自分で稼いだお金は、いつも見るお金よりも、数倍も輝いて見えた。

よく頑張ったなって、福沢諭吉が笑ってるように見えたんだよ。本当に。

11、再会

夜が過ぎて、朝が来る。

ホントに来るかどうか心配していたけど、ゆいは面会時間が始まる9：00きっかりに来た。

それから2人は謝りっぱなし。

俺が、

「昨日はごめん。気を遣えなくて…」

と言えば、

「あたしも、機嫌悪くさせちゃってごめんね。病気で入院してるのにあんなコト言っちゃって…」

最初の15分は、ずっとこんな感じの会話が続いた。

それからは昔のように明るく笑って話せた。

なんだか懐かしい気持ちになった。

渡せなかったチョコレートも受け取ってもらった。

ゆいは、

「ありがと〜！ここで食べてもいい…？」

「いいよ。高かったんだからな〜。」

2人でチョコレートを食べた。

汗水たらして必死に働いて買ったチョコレートは、なんだか市販のチョコレートよりも、かなり美味しかった。

高級チョコだったつてもあるけどね。

だって、ゆいの笑顔を見ながら食べれたんだから。

この笑顔を見る為に働いてきたんだから。

この努力も、この疲れも、この貧血という病気も、ゆいのためだと思えば、どうってことない。

気がつけば泣いてた。

笑いながら泣いてた。

ゆいも泣いてた。

ゆいが抱き締めてくれた。

もう悲しい思いはさせちゃいけないんだ。

絶対に。絶対に。

それから面会時間ギリギリまで2人で話した。

退院が3日後だと医者から聞いてたから、ゆいとテートのプランを考えた。

「退院って水曜だっけ？」

「確か木曜って言ってたな。」

「木曜はちよつとね……。」

「別に違う日でもいいよ。それより木曜なんかあんの？」

「あたし、この春から毎週木曜に塾入るコトになっちゃってさ……。」

「ごめん……。」

「気にしない。気にしない。進学校だし仕方ないでしょ。」

「じゃあ金曜でいい？」

「わかった。楽しみにしてるから。」

「あたしも！無理だけはしないでよ？また病気になったとかイヤだし。」

「分かってるから。気をつけてな。」

「うん。じゃあね。」

そう言っつてゆいと別れた。

実は、ゆいがトイレに行っている間に、書いておいた手紙とバイト代を、封筒に入れて、ゆいのバッグの下の下の方に入れといた。これで任務完了。

この為にゆいを呼んだっていうのもある。

なんだか気分がスッキリした。

小さい頃から物事をやり遂げた事が無かったから、初めての気持ち良かった。

なんだかんだあったけど、考えてみれば、この2ヶ月良かったのか
な〜って思った。

これからも、もっともっとゆいの事を好きになれるって分かった2
ヶ月でもあったからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6205d/>

たんぽぽ

2010年11月2日03時48分発行